とかち講座

北海道・十勝から宇宙へ

第2回

道宇宙科学技術創成センター副理事長 **伊藤　献一氏**

宇宙船 帯広、大樹でも

米国ロケットプレーン社と提携

十勝にぜひ宇宙に行く玄関口になってほしい。日本の宇宙開発は国が鹿児島など南でやってきて、北海道には声が掛からなかった。ならば自分でやるんだということ。

ヒットサット　すべて道内で

けさ（23日）のニュースで超小型人工衛星「HIT－SAT（ヒットサット）」の打ち上げ成功が報道されたが、これは北海道工業大の佐鳥新先生の考案した衛星。詰まっているのは北海道の皆さんのアイデア。造ったのも、試験をしたのも北海道。きょうは道産初の人工衛星が飛んでいる記念すべき日だ。

北海道には宇宙関連の誘致構想があり、上砂川町（空知管内）に無重力実験施設もあった。でも生き残ったのは町自ら努力し、自分のアイデアで造った大樹町の多目的航空公園だけ。自分の考えでやってこそ、生き残れると感じる。

専門家の確保では、室蘭工業大や北大に航空、宇宙関係の研究室ができた。あとは何をやるか。国がやれない、独創性のあることをやって初めて存在価値がある。国の技術開発にはコスト意識がない。北海道は「商業ベースにのる宇宙開発」をする。研究者のお手伝いをする応援組織としてHASTIC（ハスティック）をつくった。

目指すのは　安価なロケット

現在、日本のロケットは大型化の一途。北海道の目標は、小さくて安い、世界初の原理で動く、売れるロケット。道内で製作した「メード・イン・北海道」だ。

北大の永田晴紀先生が開発した「CAMUI（カムイ）型ハイブリッドロケット」は、液体酸素を使いプラスチックを燃やす新しいシステム。2002年から大樹町で打ち上げ、4回成功している。将来は高さ6万㍍まで飛ばす「高層大気観測用ロケット」にしたい。

ビジネスの　可能性広がる

アメリカでは民間の宇宙開発が促進、大きな変化が起きている。ベンチャー20社が手を挙げ、宇宙はビジネスの場という意識が出ている。04年に初めて民間開発の宇宙船が、人を乗せて100㌔の宇宙に行って帰ってきた。

そういう中、しっかりした技術で取り組むのがロケットプレーン社。ビジネスジェット機にロケットを組み込み飛べる。今年6月にHASTICと業務提携を結んだ。08年に米オクラホマ州で営業運航が始まるが、ぜひ北海道でも飛行を実現したい。2012年をめどに、ぜひ帯広空港か大樹町でやってみたい。

このロケットプレーン社のXP機にカムイロケットを載せ、超小型人工衛星を積む計画もある。北海道独自の小型ロケット開発がここで花を咲かせることができる。日本での営業には宇宙航空会社の設立が必要で、ぜひ十勝資本でと思っている。北海道から宇宙への夢を、十勝の人々と追い続けていきたい。

〈略歴〉1939年札幌市出身。83年北海道大学教授。専門は燃焼工学、内燃機関学、宇宙環境応用工学。2003年NPO法人「北海道宇宙科学技術創成センター（HASTIC）」を発足させ、副理事長兼専務理事に。03年北大定年退官。北大名誉教授、日本機械学会名誉員、日本燃焼学会名誉理事。